



平成 25 年度 第 1 回 連続セミナー

『自閉症スペクトラムの理解と支援』～TEACCH に学ぶ～

川崎医療福祉大学 特任教授 / ぶどうの木 佐々木正美氏

本年度も一年のスタートのセミナーは、佐々木正美先生をお招きして、お話を伺うことができました。

はじめに、自閉症スペクトラムについて、

- ・自閉症とそうでない人が二つに分かれているのではなく、連続体としてスペクトラムのいろんなところに散りばめられたように、いろんな程度にこの特性を持った人がいること
- ・そのような特性をどのように持ち合わせながら、我々は、日々生活をしているかという視点で理解すること
- ・優れているとか劣っているということでは、適切な理解ができないこと

…をお話しくださいました。

そして、先生の長年のご経験や当事者の方のお話から、具体例を挙げて、自閉症スペクトラムの特性や学習スタイルについてお話しいただきました。嘘をつかない、裏表がない、理解できることや規則や法則をよく守ること、「適当なやり方はしないこと」という、いい特性をもったまま、本来の持ち味がちゃんと発揮できるように手伝ってあげることが大切だということでした。

今回のお話でもっとも印象的だったのは、「苦手なところは苦手なまま、放っておいてあげるといい」という点です。佐々木先生はこの点について、

「苦手なことをうんと努力をして苦しんで、二次障害にまで及んでしまうようなことをしながら、直すべきものではないのが障害です。ところが得意なところが、人よりもよくできるようになっていくというところが、必ずあるのです。」

「自閉症スペクトラムの方々は、苦手なことを直したり修正したりするような人に出会うことをもっとも恐れています。優れた力を見つけてくれる人、協力・支援してくれる人、そこを教育してくれる人を求めています。ご家族や先生が惚れ惚れするようなものでなくても、優れた能力は必ずあるのです。本人の好きなことをいろんな程度にやらせておいてやれるような環境を用意してあげたい。得意なことがもっとよくできるように上手に応援して育てていくうちに、苦手なことは気にならないようになり、実際消えていくように見えます。」

…とお話しされていました。

また、自閉症スペクトラムの方々ご本人のお話によると、発達障害に対する無知から、理解できないのに、熱心に教育しようとか躡けようとかする「熱心な無理解者」が自閉症スペクトラムの方々を一番苦しめているとのこと。善意であれば許されるというものではありません。まずは理解することです。理解できないのなら、「こうしなさい」と言うのではなくて、「どうしてほしいか」を聞くような姿勢で、日々接してほしいということを、佐々木先生はおっしゃっていました。

TEACCH プログラムについては、「自閉症スペクトラムの方々は、狭いところへ強い関心が向かっているから、それについて集中します。この道一筋なのです。普通じゃなかなかできないことです。人様に迷惑をかけるとか、将来ひどく傷つくとかいうことでない限り、この道を見つけて応援することです。」とお話しくださいました。佐々木先生のお話にあったように、「そんなことしちゃダメ、こうです。」と無理矢理こちらが良いと思う世界に入れて前から引っ張るのではなく、本人が好んでやっていきそうなところを、まっすぐに励ましていってあげることができるように、後押しすることが、支援者として必要な姿となるようです。

「(自閉症の特性をもったまま) そのように育て、応援していくことで、自閉症スペクトラムの方々は、幸せな日々を送ることができます。そして、いろんなことがいろんな形でできるようになっていきます。」とお話になって、佐々木先生は講演を閉じられました。

佐々木氏の講演『自閉症スペクトラムの理解と支援』Q&Aコーナー より

「苦手なことは、苦手なまま、放っておいてあげるのがいい」という先生のお話について寄せられた質問と先生のご回答を紹介します。

Q ; 小2の息子は、小1の頃から授業に参加できず教室の後ろで読書などをして過ごしている。この場合も、授業に楽しみを見いだせるようになるまで、気長に待つべきでしょうか？

A ; こちらが適応するんですよ。TEACCHはこの子たちが生き生きと活動し、安心して学べるように、その子に合わせた教室を作る努力をするんです。なぜかという、自閉症・発達障害の子どもがこちらが予め用意した環境に自分の方から慣れ親しんでくる、取りかかってくる、こういうことは本当に困難だからです。こちらが希望する期待する望んでいる教室に入れるんじゃないんですよ。この子が適応できる教室を作ってもら努力をする。その教室がみんなと交わりの中でできるか、この子一人にしてあげるのか、あるいは3人とか5人の教室でそれができるのか、学校とよくご相談になってみてくださいと良いです。

Q ; TEACCHプログラムは、障害のあるなしに関係なく、全ての人に良いものかも知れないと感じたが、「苦手なことは、苦手なまま、放っておいてあげるのがいい」という点は、障害のない人にも有効でしょうか？

A ; ある程度は、有効だと思います。ただ、一般の子どもはある程度、苦手なことを努力することで解消していく力があるんです。病気であれば、治療や努力によって治していくことができるでしょうけど、障害というのはそういうものではない。治らないですよ。だからといって、そのところを悲観的には、絶対に思わないでください。発達障害、自閉症スペクトラムのこういうタイプの子もたちは、得意なことを伸ばしていくことというのは相当力があります。逆に、苦手なことを克服していく力が、非常に弱いんですね。お子さんが小さいときほど難しいことで、保護者の方には過酷な、難しいことですが、決して苦手なことをがんばらせるなんてことはなさらないでください。

Q ; 複数担任の場合、かかわる人を決めた方が良いでしょうか？

A ; 決めた方が良い生徒と、そうでなくて、2人、3人、複数の先生が交互にかかわるっていうことを練習していくことに、今、価値がある生徒と、生徒、によって違います。個人差があります。発達障害の子どもは、最初は決まりがはっきりしていればしているほど安定するわけです。初歩的な段階では、個別担当にしてあげた方が良いですね。だんだん広めて、二人の先生が交互になっても平気とか、複数になっても平気とか、それが3人になっても、どの先生になってもとなっていけば良いです。早くやれば良いとばかり考えすぎて無理矢理なさらしないで、個別から複数にとゆっくりと決めてかれれば良い。これはもう、この子たちに教育する時の一つの大切な方法ですよ。決して焦らないで、無理をしないでと思います。

最後に、全ての質問に通じるTEACCHの考え方の一部をご紹介します。

「その子その子をきちんと評価をして個別に対応していくということの一つとして、この子に合わせて環境を作る。この子に合わせて適応しやすいように、こちらが環境や教材や教室を作る。こういうことをしっかりなさりながら、教育や指導をしてくださると良いですね。組織が先にあるわけではない。TEACCHでは組織は後ですよ。そういう組織を作る努力をする。こちらが予め持っている環境や状況、それにこの子この人を合わせるというやり方というのは、成果が上がらないです。それはもう、学校であれ、家庭であれ、職場であれ、全てのところでそうです。」

★★★先生のお話や資料にあったように、自閉症の障害特性やTEACCHの哲学・理念／実践の基本に立ち返って、目の前の問題を捉え直してみると、糸口が見えてくるのではないかと思います。★★★

TTAP講習会

6月1日（土）講師に自閉症サービス理事長の中山清司先生をお招きしてTTAP（TEACCHトランジションアセスメントプロフィール）講習会が千葉のきぼーるで行われました。県内だけでなく県外からも福祉施設の職員や学校職員の方など26名にご参加いただきました。今回、定員を超える多くのお申込みをいただき、残念ながら参加できなかった方々申し訳ございませんでした。来年度も中山先生をお招きしてTTAP講習会を実施する予定です。是非、ご参加ください！



TTAPは、青年期・成人期の自閉症スペクトラムの人達が対象の検査法で、就労や社会生活に必要なとされる様々な機能について、その能力や態度を測定するフォーマルなアセスメントです。自閉症スペクトラムの特性を活かすアセスメントとしては、とても有効であると言われていています。

午前中、TTAPについての講義が行われ、午後には県内の特別支援学級に在籍する生徒さんが検査者として協力してくださり、実際にTTAPの検査を実施しました。

TTAPは、3つの尺度（直接観察尺度、家庭尺度、学校・作業所尺度）と6つの領域・12項目（職業スキル、職業行動、自立機能、余暇スキル、機能的コミュニケーション、対人行動）に構成されています。

2時間あまりの直接観察尺度の検査をグループの担当者が交代で検査を行いました。検査者は、必要以上に言葉で説明をしないことが大切であると講師の中山先生からアドバイスを受けました。



職業行動：検査項目 13-18

封入作業の写真

封入作業ができるか、5分間継続して作業ができるか、音による課題への集中、生産性、丁寧さ、監督者なしの様子を検査します。

その後、評価結果（合格、芽生え反応、不合格）を基にプロフィールを作成し、各グループ毎に、適切な課題の設定を検討しました。課題を設定し、支援方法を考える時には、「なぜこの課題を設定したのか」「なぜこの支援が有効だと思うのか」ということをTTAPの検査結果から具体的に提示することが大切であると講師の中山先生はお話しされました。課題設定には、「芽生え反応」の部分に注目し、本人の得意なことを活かした支援方法を考えることが重要であることも学びました。

また、保護者には、検査結果を伝えると共に、本人の行動の特徴や今後の優先課題や指導・支援方法を示し、保護者や関係者が活用できるようなレポートを作成することが重要だと話されました。

自閉症スペクトラムの人が、学校を卒業した後の成人生活は、とても長い年月です。地域で幸せに暮らしていくために、必要な支援を具体的にできるTTAP検査は、今後重要になってくると思います。講習会は、一日にわたるスケジュールではありましたが、受講生の方々から、「直接、検査道具に触れ協力者を前に検査することができてよかった」等、コメントをいただきました。是非、現場で実践していただけると嬉しいです！

検査結果をもとにグループごとに課題、支援方法を検討しました。



来年度、平成26年6月14日（土）にTTAP講習会（講師：中山清司先生）を予定しております。是非、御参加ください。

（吉村 奈津江）

「お茶のみ話」



今回は、あさひ自閉症研究会の取り組みをご紹介します。



あさひ自閉症研究会では、旭市を中心に、定期的に自閉症に関するセミナーを開催しています。

旭市は千葉県の北東部に位置し、知的障害のある方の通所施設や入所施設等も多数存在しますが、主に研修会等の開催される都市部へのアクセスが悪く、「遠くて行きづらい…」という声を多く耳にしてきました。そこで、近隣福祉施設関係者の自閉症理解および支援技術の向上を主な目的に、NPO 法人あおぞら・東総権利擁護ネットワーク理事長大屋滋が会長、ロザリオ発達支援センターが事務局となり、活動を開始しました。

平成22年7月に第1回のセミナーをおこない、今までに10回の講義形式のセミナーをおこなっています。セミナーでは、主に県内で自閉症支援について最前線で活躍されている方々を講師お招きし、実践事例を通じて自閉症支援の理論について学んでいます。

先日開催されたセミナーでは、地元匝瑳市にある八日市場特別支援学校の教頭である西村先生にご講演いただきました。質疑応答では、特別支援学校と、卒業後の選択肢の一つである通所施設との連携についての意見が飛び出し、その場で双方の立場からの意見交換がおこなわれるという場面がありました。

このように、この地域での課題について検討していく一つのきっかけになっていくことを願っています。7月には、初めての試みとして、自立課題の作成セミナーの開催を予定しています。

今後も、この地域でのより良い支援の実践を目指して活動を進めていきます。



あさひ自閉症研究会事務局 松尾真裕子

平成25年度 TEACCHプログラム研究会 第4回連続セミナーのお知らせ

期 日：平成25年10月19日（土）13:30～16:30（受付開始13:00）

場 所：千葉県青少年女性会館大ホール（千葉市稲毛区天台6-5-2）

演 題：「地域で暮らす」（仮題）

講 師：中井 百合子 氏（保護者・山梨県TEACCHプログラム研究会会長）

（編集後記）

佐々木正美先生の講演、TTAP 講習会と今年度のセミナーが始まりました。スタッフになって2年目の私ですが、毎回、講師の先生方はもちろん、参加されている皆さんやスタッフたちから多くの刺激を受け、力をいただいています。最近、職場で感じることは、自閉症の特性を理解することはとても大切ですが、やはり「個」が重要だということです。「自閉症の特性だから」と決めつけてはいないだろうか日々振り返り、支援方法を見直しています。これからもT研で勉強します！そして実践あるのみです！（吉村）